

論文の和文要旨

論文題目

日本人高校生の英作文に見る文法特性の発達
(長期的研究)

氏名

村越 亮治

本研究は、日本の英語学習者集団の文法知識の使用状況とその発達について調査したものである。分析対象データは日本人高校生の英作文で、そのなかで使われた文法特性を、高校1年次から高校3年次まで長期的に調べている。英作文タスクについては、学年ごとに段階的に異なるシラバスにより、年次ごとにトピックもテキストタイプも異なるタスクが与えられている。その1～3学年次に書かれた3つの英作文をそれぞれ分析し、どのような文法項目が使えるようになっているか調査した。また、英作文における文構造の複雑さについても調査し、別の側面から文法運用能力の発達を見取することを試みた。さらに、別の日本人高校生学習者集団の英作文データ(上記高校生のもと同じタスクのもの)の分析により、タスクの違いに起因して使われる文法項目の特定を行った。

まず、CEFRのレベルを弁別する基準特性となっている文法項目と、中学校検定教科書のなかで目標文法として挙げられている文法項目(合計71項目)をリストにまとめた。そしてそのリストを使って、当該高校生の3年間の英作文のなかの文法項目の使用をチェックし、1/0の2値データを作成した(1: 正確な使用が見られる, 0: 誤った使用が見られる/使用が見られない)。そして、文法項目の正確な使用の有無をテスト項目の正解・不正解に見立て、コンピュータ・ソフトウェアを使って、1/0の2値データについてラッシュモデルに基づく分析を行った。それぞれの文法項目の項目難易度と学習者の能力値を求め、その分布状況を調べることで、被験者である高校生が使えるようになっているとみなされる文法項目の特定を試みた。結果として、ラッシュモデルの分析で抽出された文法項目は、CEFRのA2レベルの基準特性となっているもの、または中学校検定教科書の目標文法となっているもの、すなわち日本の英語教育においては初期に学習される文法項目のみであった。しかも、高校3年次になってようやく、中学校3年次に学習する文法項目を英作文のなかで使えるようになっていることがわかった。また、使えるようにな

っている文法項目の発達状況に加えて、統語的複雑さの指標で、異なる CEFR レベルでの数値がわかっている Mean Length of Utterance (MLU)の発達についても調査したところ、高校1年次では A2 レベルにも届かず、高校3年次でも A2 レベルの上位にとどまったが、Friedman 検定および多重比較によって、1～3年次で統計学的に有意な発達が確認できた。また、流暢さの指標としての作文の総語数と MLU の相関係数 (Pearson's product-moment correlation coefficient) を調べたところ、学年を追うごとに、それらの相関が高くなっていることがわかり、ライティングの熟達度の向上がうかがえた。

次に、タスクに依存して出現する文法項目を特定するために、別の学習者集団による英作文データを分析した。この学習者も1～3学年の高校生で、民間英語試験のスコア比較により、本研究の主たる被験者である高校生とほぼ同レベルの英語力を持っていると判断できた。この追分析を行ったのは、主たる被験者は各学年で異なる英作文を書いているため、ある文法項目が使われていることが、文法知識の発達によるものなのか、特定のタスクで必要とされたためなのか、判然としなかったからである。この別の高校生集団には、主たる被験者が異なる学年次に書いた3つの英作文すべてに、各学年で同時期に取り組んでもらい、3つの異なる英作文タスクの間で、文法項目の出現状況に違いがあるかどうかを調査した。具体的には、主たる被験者の英作文分析で使用した文法項目リストで、3つのタスクにおける71の文法項目の正確な使用の有無を調べて、得られた同じ学習者の1/0データのセット(3タスク×3学年)を Cochran's Q 検定にかけ、出現が有意に異なる項目を、タスクに依存して出現する文法項目と判定した。この分析によってタスク依存項目を特定した後、再度、主たる被験者の3年間の文法運用能力の発達状況に立ち戻り、各学年の異なるタスクで抽出された文法項目から、追分析で特定したタスク依存項目を除外した。残った項目をタスクに依存しない出現項目として、その経年変化を見たところ、学年を追うごとに発達していることが認められた。

文部科学省が設定している、高等学校の英語教育の到達目標は、生徒の卒業時まで CEFR の B1 レベルの英語力を身につけさせることである。文法知識がここで言う「英語力」の一部だと考えると、3年次までの英作文から、使えている文法項目として、B1 レベルの文法項目が1つも抽出されなかったことは、日本における英語の授業実践の課題を端的に表しているかもしれない。本研究の教育的示唆として、まず、英語教師は文法指導の際に、それぞれの文法項目がどのような場面で頻繁に使われるかを教える必要があるということが挙げられる。また、生徒が自らの言語知識を自ら選んで使い、試行錯誤をしながら、より着実に習得していけるように、授業のなかで、英語で作文する機会を多く

与える必要があるということも強調しておきたい。さらに、研究のなかで、異なるタイプのタスクが、それぞれ特定の文法項目の使用を促すことが、あらためて確認されたが、このことから、学習者ができるだけ多くの文法項目の使用を試みることができるようにするために、さまざまなタイプのライティングタスクを授業で与える必要があることも再認識されたい。加えて、本研究で分析したような特定の文法項目の使用状況は、学習者のライティング能力の一つの指標となりうるということも挙げておきたい。文法項目のチェックをライティング評価に使うことで、英語教師はより客観的に生徒の英作文を評価することができるようになり、時間がかかると考えられがちなライティング評価をより効率的にできるようになるかもしれない。そうなれば、より積極的に授業のなかでライティング活動を導入するようにもなるだろう。本研究で行ったような、より多くの学習者の言語産出データの集積と分析が、将来の英語教育のための、言語活動の再検討や、より実効的なシラバスデザイン、より効果的な教材開発に寄与することが期待される。